

[平成19年度普及に移す技術]

[技術名]ニホンナシのハウス栽培における減農薬防除体系

[要約]周年被覆下のニホンナシハウス栽培において問題となっている害虫防除は、ハダニ類がミヤコカブリダニによる天敵資材を利用した防除、アブラムシ類は発生時期を特定することにより防除回数を大幅に軽減できる。

[キーワード]ニホンナシ、ハウス栽培、減農薬、ミヤコカブリダニ

[担当]福井農試・園芸・バイテク部・果樹研究グループ

[連絡先]0776-54-5100 h-taniguchi-ii@pref.fukui.lg.jp

[背景・ねらい]

ハウスナシ栽培管理上問題となるのは、ハダニ類、アブラムシ類などの害虫が急激に増加することで、このことが薬剤散布回数を増加させる原因となっている。このため、害虫の発生活消長を把握するとともに、天敵農薬を利用した減農薬防除体系を確立する。

[技術の内容・特徴]

- 1.周年被覆栽培では病気の発生はほとんど無く、逆に害虫は増加する。特にハダニ類、アブラムシ類は毎年発生する。
- 2.主な防除方法は、次のとおりである。
ハダニ類：天敵利用＋薬剤防除1～2回
アブラムシ類：開花前後1回、新梢伸長期1ヶ月間隔での薬剤防除
- 3.ハダニ類の発生は3月下旬から9月中旬頃に多く(図1)、化学合成農薬散布では7回程程度の防除が必要であるが、春先にミヤコカブリダニ(商品名：スパイカル)を放飼することで、その後の発生をほぼ抑えることができる(図2)。放飼はハダニ類発生初期の3月下旬以降2～3回行い、放飼方法はる紙と画鋏を利用し、写真1のような方法で行うと、簡単で樹への移動が早い。
- 4.アブラムシ類は開花時および新梢伸長期(開花後約3ヶ月間)に発生が見られ(図3)、その期間に対応し、約1ヶ月間隔で薬剤散布を行うことで減農薬防除が可能である。
- 5.ミヤコカブリダニは化学合成農薬としてカウントされないため、年間7成分前後での防除が可能である。

[技術の活用面・留意点]

- 1.ミヤコカブリダニは化学合成農薬で死滅する可能性があるため、影響の少ない薬剤を選択する。
- 2.ミヤコカブリダニが均等に生息していない場合やハダニ類の密度が高い箇所は局部的に多発するので、部分的な薬剤防除が必要である。
- 3.年によりカイガラムシ類、イラガ類が発生するため、適時薬剤散布を行う。

[普及計画]

普及目標：エコファーマー等減農薬ナシ栽培農家 3戸

普及対象：ハウスナシ栽培生産者

普及に向けた対応：ホームページによるPR、普及指導員との連携

[具体的データ]

図1～3は「幸水」栽培ハウスでのデータ

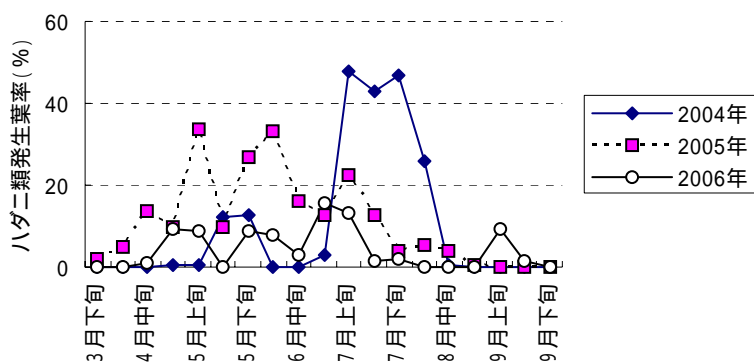


図1 ハダニ類の発生推移 (3年間)



写真1 天敵放飼方法

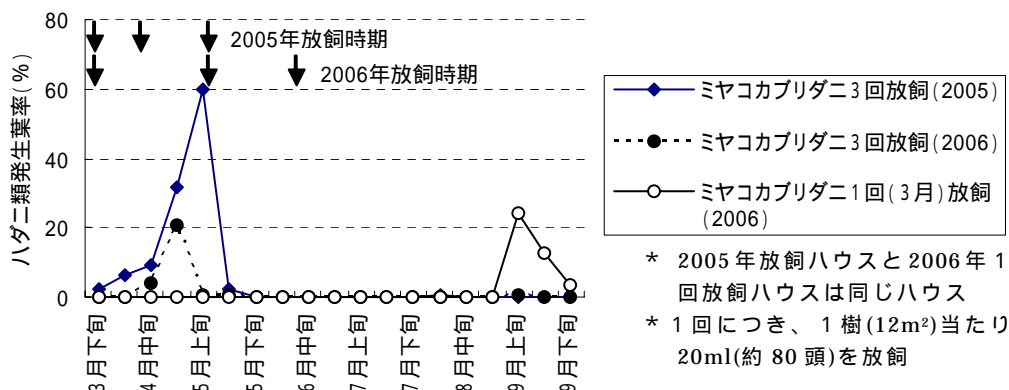


図2 ミヤコカブリダニの放飼効果

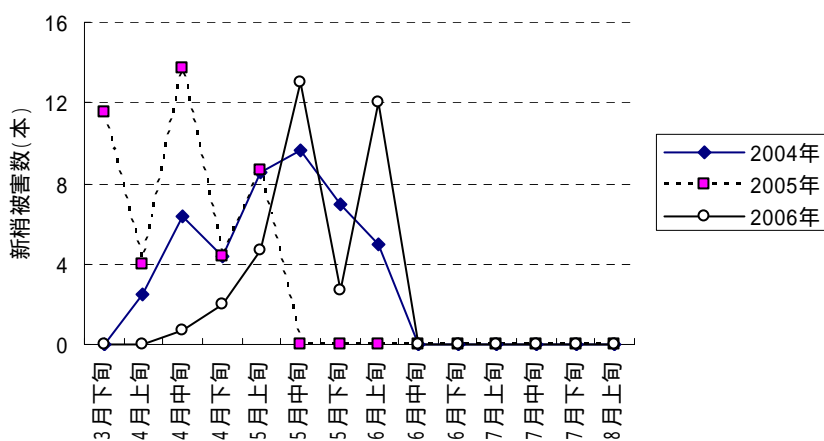


図3 アブラムシ類の発生推移 (3年間)

[その他]

研究課題名：ニホンナシの主要病害虫発生予察、簡易栄養診断技術の開発

研究期間：2004～2007年度

研究担当者：谷口弘行、長澤清孝、坂川和也